『宋元學案』における學案表と師承關係

――その内容と學術的意味について――

連　凡

はじめに

中國清代浙東學派の代表者である黄宗羲・黄百家・全祖望・王梓材・馮雲濠ら多くの編者によって完成された百卷本の宋元儒學思想史である『宋元學案』[1]は、黄宗羲が獨力で完成した『明儒學案』とともに、中國學案史上の雙璧とも言うべきである。ただ、兩者は同じ「學案體」の著作に分類される一方で、いくつかの違いもある。編纂と論述の方式においては、『明儒學案』は學問の流派、學者の學術宗旨と思想の概括に重點があって「哲學史」の性格が濃厚であるが、『宋元學案』は學術の源流と師傳關係の分析に重點が置かれており、「思想史」の性格が濃厚である。その具體的な表現として師傳關係を圖式化した「學案表」の存在は、『宋元學案』の一大特色であると言えるだろう。しかし、「學案表」に對する批判もある。例えば、陳祖武は『中國學案史』第七章「『宋元學案』的纂修」において、學案表が複雜に過ぎることと時間的スパンが長すぎることとをもって『宋元學案』の「學案表」の學術價値を疑い、『明儒學案』の整然たる秩序と比べて一種の「退歩」であると見なした。[2]このように、これまでの學術界では『宋元學案』の「學案表」の役割をあまり重視しておらず、それに對する本格的研究はまだ見えていない。[3]

しかし、王梓材が指摘した通り、明代儒學の學派は朱子學と陽明學の二つの流派に大別することができるが、宋元の儒學は胡瑗（湖學）・孫復（泰山學派）及び濂・洛・關・閩（道學）以來「百花齊放、百家爭鳴」の如く數多くの學派が非常に繁榮してきた。だから『明儒學案』における十九の學案（學派）と學者（二〇八名）はあまり多くなく、その師承關係も簡單明瞭であるため、特に學案表を作る必要はなかった。それに對して『宋元學案』は全祖望らの補修を經てその中に九十一の學案・黨案・略案と二四二八人の學者が收められており、その關係が極めて複雜なので、もし學案表でその間の師承關係を明示しなければ、その全體を的確に把握することは困難である。この點から『宋元學案』においては、學案表及び正文における師傳などの師承關係の表記が必要なのだと言えるのである。[4]それだけにその内容及び學術的意味についてはなお詳しく檢討する必要がある。そこで、本稿では『宋元學案』の學案表と師承關係の内容と特色を檢討してその學術的意味を究明した上で、學者の學術思想の淵源及びその影響力などに

ついて考察したい。

一　學者の師承關係とその學術的意味

王梓材「校刊宋元學案條例」によると、黄宗羲と全祖望はかつて「學案表」を作ったが、現行『宋元學案』の各學案の冒頭にある學案表はおおむね最後の編纂者王梓材によって作成された。[5] 黄宗羲の『明儒學案』にはこのような學案表がないので、彼が果たして『宋元學案』のために學案表を作成したか否かについては疑問の餘地もあるが、少なくともその弟子萬斯同（一六三八～一七〇二）はかつて『儒林宗派』を著して、孔子から明末の儒者までの儒學の授受源流と師傳關係をすべて圖式化しており、後に全祖望と王梓材が學案表を作成する先蹤であったと言うことができる。

『宋元學案』各學案の「學案表」と正文における表記とを合わせて見ると、『宋元學案』に收められている二四二八人の宋元時代の學者の間には、「講友」「學侶」「同調」「家學」「門人」「私淑」「續傳」「別傳」「所出」「所傳」「之先」「再傳」「別派」「餘派」「之學」「之餘」などの關係があり、非常に複雜多岐であると同時に、一人の學者は往々にして多重の關係にあるため、全體が複雜で厖大な一つの人脈を形成する結果となっている。

『宋元學案』において、ある學者（甲）がある人（乙）の「家學」「門人」「所傳」である等と稱する際、その場合の「家學」「門人」「所傳」は、甲乙兩者間の直接の關係を示す語彙である。このような語彙を以下、本稿では「直接關係」と稱する。また同じく『宋元學案』において、ある學者（甲）がある人（乙）の「家學」「門人」「所傳」である等と稱する際、その後ろに括弧でその師（乙）の師（丙）にまで遡って、その學者（甲）はある人（丙）の「再傳」である等と稱する。これに類する語彙には「再傳」「三傳」「四傳」「五傳」「六傳」「七傳」「八傳」が有る。その場合の「再傳」～「八傳」等は、甲丙兩者間の間接の關係を示す語彙である。このような語彙を以下、本稿では「間接關係」と稱する。筆者の統計によると、『宋元學案』の正文の中に、直接關係の表記は全部で一一七〇回、三五〇六人である。間接關係の表記は全部で三一一回、一一〇七人である。附表1はこれらの關係の類別・關係名・出現回數・出現人數・人數比率を整理したものである。

附表1からわかるように、直接關係の中では門人と家學の出現する回數が最も多い。家學の實質は血緣關係を持つ門人であり、師とはその父のような家族の年長者であるにすぎない。門人と家學は合わせて人數比率の80％を占める。ここに注意すべきは、この人數比率の順位はおおむね師傳關係における親疏の程度に對應している、ということである。間接關係における順位（再傳→三傳→四傳→五傳→六傳→七傳→八傳）はもちろんそうであるが、直接關係においても、順位一位の門人と二位の家學とが最も親しい師傳關係であり、以下、講友・同調・續傳・私淑といった順で、その關係は次第に疎遠になっていく。

一方、これらの關係は更に、通例と特例の二つのカテゴリーに大別することができる。通例とは、「門人」「私淑」「續傳」「別傳」「再傳（三傳～八傳を含む）」等、人間關係のうち一般的な情況を處理するための語彙であって、『宋元學案』における人間關係の主流をなす。これに對して特例とは、「所出」「所傳」「之先」「別派」「餘派」「之學」等、特殊な狀況を處理するための語彙であって、通例からは漏れるケースを補っている。以下、通例と特例の二つの情況にわけて『宋元學

案』におけるこれらの關係の意味について詳しく檢討したい。

（一）師承關係の通例

「講友」と「學侶」―かつて案主とともに學術を檢討した者のうちで、社會地位や學術地位がより高い者は一般的に「講友」と稱するが、その逆の場合には一般的に「學侶」と稱する。そのほか、かつて案主とともにある師に師事した者同士も、互いに「學侶」と稱することがある。『宋元學案』の正文の一一七〇の關係の表記のうち、「講友」は計七十九回、「學侶」は計六十一回、出現している。例えば、卷六十四「潛庵學案」において、『嘉興志』などが魏了翁を輔廣、李燔の弟子とする見方に對して、編纂者黃宗羲・黃百家父子は『鶴山集』の記載によって「講友」の關係であると判斷した。また、卷十二「濂溪學案下」で黃百家は周敦頤の上司である李初平を周氏の弟子に列したが、後に全祖望は李初平を周敦頤の「講友」に列したのである。その理由は、二人は學問上の友人ではあるが、李初平は周敦頤の上官で、その社會的地位がより高いからである。「學侶」の用例は、例えば、卷八十五「深寧學案」に王應麟の弟王應鳳、及び學友である韓性を「深寧學侶」と稱している。

「同調」―案主と學術的觀點が同じであり、或いは近いのであるが、その學問の出てくる源は一致していない者。『宋元學案』の正文中、「同調」は全部で七十五回出現している。例えば、卷六十「說齋學案」において、唐仲友を「永嘉同調」と稱した。その理由は以下の通りである。金華出身の唐仲友は浙東永嘉學派（薛季宣・陳傅良・葉適）と同時代の學者で、經史制度の學をなし、浙東永嘉學派と學風が近い。唐氏は公事で朱熹に恨みを買ったが、當時政府の要人（王淮ら）が唐氏に加擔し、ついに「僞學」（所謂「慶元黨禁」）の名目で朱熹及び浙東學派の學者（葉適ら）を攻擊し抑壓したため、浙東の學者は唐氏と絕交した。從って唐氏は浙東の學者とは交流がなく、その見解は自己單獨で獲得したものなのである。[6]

「家學」―案主の親族・子孫の中で、その學術の傳承・系譜を受け繼ぐ者。一般的にある學者の父・兄或いは同族の先輩を指す。『宋元學案』の正文中、「家學」は全部で二九三回出現している。例えば、卷六十七「九峰學案」で蔡沈（九峰）の子蔡模・蔡杭・蔡權をみな「九峰家學」と稱し、卷五十一「東萊學案」で呂祖謙（東萊）の弟呂祖儉を「東萊家學」と稱し、卷八十九「介軒學案」で董夢程（介軒）の族弟董鼎を「介軒家學」と稱している。

「門人」と「私淑」―案主に正式に入門した弟子としてその學術を傳えるものは「門人」という。案主に直接入門した事實はないものの自ら弟子と稱してその學術を傳えるものは「私淑」という。『宋元學案』の正文中、「門人」は計五四四回、「私淑」は計二十一回出現している。「門人」の例を擧げる必要はないであろう。「私淑」の一例として、胡安國は程頤の私淑の弟子で、卷十六「伊川學案下」に「伊川私淑」と稱されている。

「續傳」と「別傳」―案主の門人ではないが、その學術を繼承して述べ傳えており、かつ自ら「私淑」と名乘っていない者は「續傳」という。一方、學術はもともと案主に由來するが、後に別に一派をなす者は「別傳」という。『宋元學案』の正文中、「續傳」は全部で七十二回出現している。例えば、金朝が滅んだ後に、湖北德安の人趙復（江漢）が元の捕虜になって北方に定住した後、周子祠を建てて周敦頤を祭り、太極書院を建てて廣く門徒に程朱理學を教授した。その門下に姚樞・許衡・劉因らが興ってさらに大いに程朱理學を廣めた結果、道

學（朱子學）は一つの學派として始めて正式に北方に興った。[7] 趙復の學問の師傳は未詳であるが、上述の通り、彼が程朱理學を受け繼いでそれを傳えた人であるため、卷十六「伊川學案下」では彼を「伊川續傳」と稱し、卷四十九「晦翁學案下」では彼を「朱學續傳」と稱し、卷九十「魯齋學案」ではこれをあわせて「程朱續傳」と稱している。そのほか、卷四十九「晦翁學案下」では方鎔・余季芳・兪浙・熊朋來・兪琰をみな「朱學續傳」（朱熹）と稱し、卷五十「南軒學案」では木天駿を「張學續傳」（張栻）と稱し、卷五十一「東萊學案」では宋濂と王禕を「呂學續傳」（呂祖謙）と稱し、卷八十二「北山四先生學案」では方鎔を「朱學續傳」（朱熹）と稱している。

一方、『宋元學案』の正文中、「別傳」は計二回出現するが、實はその用例はただ一例のみである。すなわち卷九十「魯齋學案」と卷九十一「靜修學案」はともに劉因を「江漢別傳」と稱している。その理由は以下の通りである。前述の通り、劉因の學問はもともと趙復（江漢）から出て、同門の許衡とともに元代「北方兩大儒」と稱される。彼もかつては元朝に仕官したが、後に致仕し隱居して命を終えた。一方、許衡は趙復の思想と事業の忠實な繼承者として、終生元朝に仕え、長期にわたって國子監祭酒という最高學府の學長の職にあり、數十年間に元朝の著名な士大夫はおおむねその門下から出たという。しかし、黄百家と全祖望の考證によると、劉因は許衡の人となり（終生元朝に仕官）と學問（程朱理學に拘泥してついに章句訓詁の學に流れる）に對して不滿に思っており、劉因の人柄（狂狷）と學問は實は趙復・許衡と大いに異なっているため、そこで全祖望は趙復と許衡の二人を卷九十「魯齋學案」（「黄氏原本」は「北方學案」と稱する）に入れ、劉因のために別に卷九十一「靜修學案」（「黄氏原本」は「北方學案」に附す）を設けて彼を「江漢別傳」と稱したのである。

「再傳」―すなわち又弟子・孫弟子（直弟子の弟子）を指す。『宋元學案』の正文中、「再傳」は全部で一一六回出現するが、大きく二つの用法に分かれる。一つ目の用法は、單獨には用いられず、所謂「間接關係」を示すものである（計一一三回）。すなわち『宋元學案』ではある學者をある人の「家學」「門人」「所傳」と稱する際、後ろの括弧内でその師の師にまで遡って、その學者はある人の「再傳」であるという。この場合の「再傳」は實に「二傳」の意味である。例えば、卷二「泰山學案」に馬默を「徂徠門人（泰山再傳）」と稱する場合、彼は石介の門人、孫復の孫弟子である。卷七十四「慈湖學案」で楊簡の長男楊恪を「慈湖家學（象山再傳）」と稱する場合、彼は楊簡の師陸九淵の孫弟子である。卷八十「鶴山學案」で魏了翁を「范氏所傳（朱、張再傳）」と稱する場合、魏了翁は朱熹・張栻の孫弟子と考えられたわけである。これを更に遡及していけば、『宋元學案』における間接關係は、「三傳」乃至「八傳」にまで至るのである（それぞれの出現回數は附表1を參照）。しかしそれらはもはや推測による「學統系圖」に過ぎず、學術的意義は薄い。これは『宋元學案』の「學案表」が批判される主な原因の一つでもある。[8]

二つ目の用法は、單獨に用いられて、所謂「直接關係」を示すものである（計三回）。これはある學者について、その師傳は未詳ながら、その師の師のみは知り得る場合である。『宋元學案』には五つの例がある。卷三十四「武夷學案」に張默を「武夷再傳」（胡安國）と言う。その小傳及び後の全祖望と王梓材の案語によると、張默の師傳は未詳であるが、彼は胡安國の『春秋』の學を傳えたという。だから王梓材は彼を胡安國の孫弟子と見なした。[9] 同樣に曾漸を「武夷再傳」と言

う。その小傳及び後の全祖望と王梓材の案語によると、曾漸は湖南學派に屬し、かつて朱熹によって批判されたが、胡安國の死後二十七年を經て生まれた人であるため、胡安國の直弟子ではあり得ない。だから全祖望は彼が胡安國の私淑であると考えた。[10] 卷七十「滄洲諸儒學案下」で、丘富國を「晦翁再傳」と稱する。その小傳に「朱子の門人に受業す[11]（受業朱子之門人）」と言う。卷八十三「雙峰學案」は汪克寛・汪時中の二人をともに「東山再傳」と稱するが、これは二人を、その從祖父（祖父の兄弟）汪華（號は東山）の孫弟子と見なしたのである。

（二）師承關係の特例

「所出」と「所傳」―案主の學問の來源を表彰するために、特にその師を案主の前に置いてこれを案主の學問の「所出」という。『宋元學案』にはただ一例のみであり、すなわち卷三「高平學案」に案主范仲淹（高平）の恩師である戚同文（睢陽）がその前に置かれて「高平所出」と稱されている。逆に案主（學者）を、その學問の來源からの「所傳」という。例えば、上述の范仲淹を「睢陽所傳」と稱する。卷九十「魯齋學案」で趙復（江漢）を案主許衡の前に置いて、許衡を「江漢所傳」と稱する。「所傳」という師弟の關係は「門人」よりも疎遠であり、一般的に早年の入門の師を指す。例えば王梓材は、上述の黄宗羲・黄百家氏父子による輔廣と魏了翁の「講友」關係についての考證に從い、さらには全祖望補本の卷七十二「二江諸儒學案」所收の范子長の小傳[12]によって、魏了翁が范氏の傳承に連なり（「范氏所傳」）、輔廣、李燔とは講友の關係にあると判斷して學案表に載せ、魏了翁の傳承關係を定めた。

「之先」―ある地域の學派の先驅者を表彰するためにこれをその學派の「之先」と稱する。『宋元學案』に二つの例があり、みな全祖望が設けた卷六「士劉諸儒學案」にある。張載の「關學」より早く興った關中の學者申顔・侯可を表彰するために、全祖望は二人を「關學之先」と稱した。さらに全祖望は、蜀の人である宇文之邵（止止）が實に范祖禹（正獻）の蜀學の先驅者であると考え、これを「蜀學之先」と稱した。[13] これらの人物はみな思想史上あまり有名ではないが、その宋學を開いた功績は銘記すべきである。

「別派」―直系の「門人」「再傳」とは區別される、師傳不明の者。『宋元學案』には二つの用例だけがある。すなわち卷七十八「張祝諸儒學案」に杜可大・荊□（佚名）二人はそれぞれ「邵學別派」と稱する。邵雍の先天象數學の直弟子はあまり多くないが、杜可大は、邵雍の早死の門人王豫（字は悅之、また字は天悅）の墓が盜掘された後、盜賊からその副葬品中の『皇極經世體要』一篇、『內外觀象』數十篇を得て、邵雍の學問を受け繼いだ、と自ら述べている。但しその話の信憑性は未詳である。[14] 一方、荊□（佚名）は隱者でかつて邵雍の皇極數學を教授したと言うが、その具體的な傳承もよく分からない。それ故に、王梓材は二人を「邵學別派」と稱したのである。[15]

「餘派」―『宋元學案』にはただ一例がある。すなわち金朝の李純甫である。卷九十八「荊公新學略」では彼を「王學餘派」と稱し、さらに卷九十九「蘇氏蜀學略」では彼を「蘇學餘派」と稱している。そこで、彼自身の學案である卷百「屏山鳴道集說略」では、これをあわせて「王、蘇餘派」と稱している。李純甫は金朝の文章家であり、王安石新學と蘇氏蜀學の直系の弟子ではないが、全祖望は、その學問には主に二つの特色がある、一つは佛老異端の學を混じえていること（三教合一論）、一つは文章（文學）を重んじていることであり、この二點によって李純甫は新學と蜀學の餘派と見なすべきである、と考え

た。これによって、王梓材は彼を「王、蘇餘派」と稱したのである。

「之學」―『宋元學案』には二つの用例がある。すなわち「元祐之學」と「慶元之學」である。これは「元祐黨禁」と「慶元黨禁」に關する固有名詞である。卽ち「元祐黨禁」において蔡京ら新法黨による攻擊を蒙った「元祐黨人」の學術を「元祐之學」と稱し、「慶元黨禁」において韓侂胄らによる攻擊を蒙った朱熹らの「慶元黨人」の學術を「慶元之學」と稱した。『宋元學案』で「元祐之學」と「慶元之學」と稱された者は、實に洛學・朱學などの學派に屬さない學者・大臣を指す。そのほか、南宋の初期に秦檜が興した「紹興學禁」においては、所謂「專門之學」（二程子の洛學を指す）を禁止した。例えば、卷十九「范呂諸儒學案」では「元祐黨人」の龔夬・上官均・杜純・常安民・李深を「元祐之學」と稱し、卷七十九「丘劉諸儒學案」では「慶元黨人」の林大中・游仲鴻・趙鞏を「慶元之學」と稱する。そこで、卷九十六「元祐黨案（附『紹興學禁』）」では龔夬・上官均らを含むすべての「元祐黨人」の名簿（「元祐黨籍」）を作成した上、章惇・安惇・蔡京・蔡卞らの「元祐黨人」を攻擊した大臣を「攻元祐之學者」と稱し、さらに秦檜・陳公輔ら洛學（「專門之學」）を攻擊した者を「攻專門之學者」と稱した。

「之餘」―ある學派（黨派）に直接は屬さず、かつそれを信ずる同調または私淑と見なされる者を指す。『宋元學案』には四つの用例がある。すなわち「元祐之餘」「張學之餘」「朱學之餘」「邵學之餘」である。上述のように、「元祐黨人」の學術を「元祐之學」と稱するが、卷三十五「陳鄒諸儒學案」では陳正・夏侯旄・唐恕・胡宗伋・劉若川・鄧名世を「元祐之餘」と稱した。その理由は、彼らは「元祐黨籍」には收錄されなかったものの、實に「元祐黨人」以外の「元祐之學」の同調者であったから、これを「元祐之餘」と稱したのである。卷五十「南軒學案」では張學（張栻の學術）に私淑する元儒方敏中を「張學之餘」と稱し、卷六十五「木鐘學案」では浙東出身の朱學を信ずる元儒章仕堯・史伯璿を「朱學之餘」と稱し、卷七十八「張祝諸儒學案」では邵學（邵雍の學術）を信ずる學者祝泌・朱元昇を「邵學之餘」と稱した。因みに張栻の嶽麓弟子は抗元戰爭で殆ど殉國している。全祖望が彼らを「張學之餘」「朱學之餘」「邵學之餘」と稱したのは、その學術傳承の迹を顯彰せんとする意圖に基づくものであろう。

「別附」―特に師門を裏切った門人・後學を指している。これはもちろん編纂者が貶めて排斥する意味を込めている。『宋元學案』には五ケ所ある。卷四「廬陵學案」において、蔣之奇はもともと舊黨の歐陽修の弟子であったため、後に新黨によって元祐黨籍に入れられたが、彼は苦境を逃れるために、かえってその師歐陽修を彈劾した[16]。卷三十二「周許諸儒學案」で蕭振はもともと程頤の弟子許景衡の門人で、洛學の孫弟子に當たるが、南宋初期に宋金の戰爭をめぐって、秦檜（主和）が洛學を支持する趙鼎ら（主戰）を排斥し「紹興學禁」の名目をもって洛學を攻擊し抑壓した際、蕭振はその師傳を隱して秦檜に付くことによって陞進した[17]。そのほか、卷三十二「周許諸儒學案」で鄭伯熊（文肅）の弟子にして立身出世した後に師の弟鄭伯英（歸愚）を侮辱した木待問[18]、卷六十五「木鐘學案」で胡長孺の弟子にして朱學に背いて陸學に歸した浮屠文誠[19]、卷九十八「荊公新學略」で王安石に背いた門人後學たる呂惠卿・蔡京・蔡卞・林希・蹇序辰・楊畏[20]を「別附」に收錄した。

「附傳」―『宋元學案』卷九十八「荊公新學略」で王安石の弟である王安禮・王安國を王安石の後に附しており、「附傳」と稱した。そ

の理由は王安禮・王安國はみなその兄王安石と異なった政見を持っており、學侶とは言えないからである。[21]

「爲新學者」―『宋元學案』卷九十八「荊公新學略」で馬希孟・方慤・孟厚・王昭禹・鄭宗顏・耿南仲・王安中の七人を、王安石の新學を信奉する者として「爲新學者」と稱している。[22]

「元祐黨籍」[23]と「慶元黨禁」[24]―これは卷九十六「元祐黨案」と卷九十七「慶元黨案」に收錄されている「元祐黨人」と「慶元黨人」の名簿である。

二　多重關係と參照法

ここで注意すべきは、學者は往々にして多重の關係にあり、『宋元學案』中で同一人物は必ずその關係者との「關係」において登場するため、一人の人物が『宋元學案』中に何度も出現する、ということである。その中の一つが主要な箇所（「主要關係」）、他は全て副次的な箇所（「副次關係」）であって、その中で「次要關係」に屬する正式名稱はすべて後の括弧內の表記を通してその「主要關係」にある場所を參照せよと明記されている（「參照法」）。「正式名稱」とは『宋元學案』における學者の完全な形の名稱で、一般的に、

官職（または諡）＋「姓」＋「字」（または「號」）＋「先生」＋「名」

という形である（もちろん一部分の正式名稱はこれらの要素の一部だけが備わっている）。例えば、「侍講呂原明先生希哲」という正式名稱の構成は、

侍講（官職）＋呂（姓）＋原明（字）＋先生＋希哲（名）

である。また、「成公呂東萊先生祖謙」という正式名稱の構成は、

成公（諡）＋呂（姓）＋東萊（號）＋先生＋祖謙（名）

である。

『宋元學案』における正式名稱の「參照」の情況は以下の通りである。

1．「正式名稱（別爲『××學案』）」と「正式名稱（竝爲『××學案』）」

「正式名稱（別爲『××學案』）」という場合は、その學者のために別に一つの學案を設けているので、詳細はそちらを參照せよということ。例えば、呂希哲は胡瑗の門人であるから、胡瑗の「安定學案」の「安定門人」の項に彼の正式名稱―「侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）」を記している。その意味は、編纂者は呂希哲のために別に「滎陽學案」を設けており、その小傳・資料等はつぶさに「滎陽學案」に收錄しているから、ここ（「安定學案」）ではその正式名稱のみを擧げるに過ぎない、ということである。「正式名稱（竝爲『××學案』）」の場合、編纂者はその學者を含む數人のために別に一つの學案を設けているから、詳細はそちらを參照せよ、ということである。例えば、卷五十八「象山學案」の「象山同調」という項目の下に「縣令陳叔向先生葵（竝爲『徐陳諸儒學案』）」という正式名稱が記されているが、それは陳葵の小傳や資料等は卷六十一「徐陳諸儒學案」（陳葵は案主の一人）に見える、という意味である。

2．「正式名稱（別見『××學案』）」と「正式名稱（竝見『××學案』）」

「正式名稱（別見『××學案』）」という場合は、その學者の小傳（事跡）等は他の學案に見えるので、ここでは省略する、という意味である。例えば、卷三十二「周許諸儒學案」の「景望門人」（鄭伯熊）という項目の下に「文懿蔡先生幼學（別見『止齋學案』）」という正式名稱を記している。その意味は、蔡幼學は鄭伯熊の門人でもあるが、その小傳等の詳細は、別に「止齋學案」に收める、ということである。そ

こで卷五十三、陳傅良の「止齋學案」を見ると、蔡幼學は「止齋門人（袁、徐三傳）」、卽ち陳傅良の門人とされており、その下に蔡幼學の正式名稱「文懿蔡先生幼學」とその小傳が記されている。「正式名稱（竝見『××學案』）」の場合、その學者の小傳にその祖・父・兄弟等の事跡を附した上で他の學案に收錄しているので、ここでは省略する、という意味である。例えば、卷五十一「東萊學案」の「東萊門人」（呂祖謙）という項目の下に「修撰陳北山先生孔碩（幷見『滄洲諸儒學案』）」がある。そこで卷六十九「滄洲諸儒學案上」を見ると、「晦翁門人（劉、李再傳）」という項目の下に「修撰陳北山先生孔碩（祖禧、父衡）」という正式名稱と小傳が收錄されており、小傳中には祖父禧及び父衡に關する記述が附載されている。

3．正式名稱（附見『××學案』）

ある人物の正式名稱は他の學案には出てこないが、ただその事跡がその學案における他の人物の小傳中に附されている。例えば卷六「士劉諸儒學案」には、「劉氏門人」（劉顏）という項目の下に「縣令曹先生起（附見『泰山學案』）」という正式名稱がある。その意味は、曹起は劉顏の門人であるが、その事跡は「泰山學案」におけるある學者の小傳中に附している、ということである。そこで、卷二「泰山學案」を見ると「縣尉李先生縕（附曹起）」という記載があり、その下の李縕の小傳中には確かに曹起の事跡が附されている。

4．「正式名稱（見上××）」と「正式名稱（見下××）」

1～3はいずれも他の學案を參照する場合であるが、これはある人物の正式名稱が同じ學案中に二回以上出現する場合である。その場合、「正式名稱（見上××）」または「正式名稱（見下××）」という表記が出現する箇所には當該人物の副次的關係（「副次關係」）が示されており、その主要な關係（「主要關係」）は同じ學案中の前文（見上）または後文（見下）中に示されている。例えば卷六十六「南湖學案」では「敬齋家學」（車瑾）という項目の下に「聘君車玉峰先生若水（見下立齋門人）」という正式名稱の記載がある。その意味は、車若水はその父車瑾の「家學」であるが、その小傳や資料等は同卷後文の「立齋門人」（杜範）という項目の下に、「聘君車玉峰先生若水」という正式名稱とともに記載されている。この場合、車若水にとって「敬齋家學」は副次的關係、「立齋門人」が主要關係、と編纂者は判斷していたことになる。「正式名稱（見上××）」は、主要關係は同卷の前文中にあり、從って小傳や資料等もそちらに見える、という場合である。

5．「正式名稱（詳見『明儒學案』）」

王梓材が指摘したように、全祖望にはもともと黃宗羲の『明儒學案』を補修する意向があったが、結局これに從事する暇がなかった。そこで、全祖望は黃宗羲の「黃氏原本」『宋元學案』を補修する際に往々にして『明儒學案』に漏れた明儒を『宋元學案』の中に附している。例えば卷九十三「靜明寶峰學案」は、全祖望の同鄕（四明・明州、今の浙江寧波）で元代陸學の代表者である趙偕（號は寶峰）の傳を收錄するが、全祖望は趙偕の門人である桂彥良（一三二一～一三八七）・烏本良（?～一三七二）・向壽（一三一〇～?）の傳を同卷中に附している。彼らはみな元末明初の人で、楊簡の四傳弟子に當たる。全祖望の見るところ、これらの學者は實に元末明初における四明陸學を傳える重要人物であって、本來ならば『明儒學案』（「師說」）において明儒の開山とされた方孝孺（號は遜志、一三五七～一四〇二）の前に收錄されて然るべきであった。しかし『明儒學案』に收錄される明代四明陸學の學者は顏鯨（一五一五～一五八九）のみであり（『明儒學案』卷六十三、

附案）、元末から顔鯨に至るまでの四明陸學の傳承は、無視される結果となっていた。そこで全祖望は『宋元學案』の中にこれらの學者を補うことで、その思想史的位置づけを明らかにしたのである。[25]實は『明儒學案』において方孝孺を明儒の開山とする見方は、その忠義と學術とを表彰せんとする黄宗羲の思想に根ざすものであって、全祖望の立場とは異なっているが、[26]史學者全祖望が同郷先賢の學術を表彰せんとする苦心と、[27]その思想史上の脈絡を重視する觀點とには、[28]我々は注目しなければならないであろう。

一方、ある學者（明初の人物）がすでに『明儒學案』に載っていても、その正式名稱が『宋元學案』に載せられている場合もある。その事跡はもちろん『明儒學案』を參照する。その場合は一般的に「正式名稱（詳見『明儒學案』）」という表記がなされる。『宋元學案』中には以下の三例がある。卷七十四「慈湖學案」の「遯翁門人」（全彦）という項目の下に「僉憲黄南山先生潤玉（詳見『明儒學案』）」とある。黄潤玉（字は孟清、鄞縣の人、一三八九～一四七七）の小傳と思想資料は『明儒學案』卷四十五「諸儒學案上三」にある。卷八十二「北山四先生學案」の「潛溪門人（朱、劉七傳）」（宋濂）という項目の下に「文正方正學先生孝孺（詳見『明儒學案』）」とある。方孝孺の小傳と思想資料は『明儒學案』卷四十三「諸儒學案上一」にある。卷八十九「介軒學案」の「鄭氏門人（晦翁八傳）」（鄭四表）という項目の下に「教諭趙考古先生謙（詳見『明儒學案』）」とある。趙謙（號は考古、一三五一～一三九五）の小傳と思想資料は『明儒學案』卷四十三「諸儒學案上一」にある。なお、上述の通り、『宋元學案』において師承關係を表す語彙は、「門人」「再傳」「三傳」乃至「八傳」であるが、このうち「六傳」「七傳」「八傳」に屬するものは往々にして明初の人物である。[29]彼らはむしろ「明儒」と見なすべきであるが、前述の通り、全祖望は『明儒學案』に漏れた明儒を意圖的に『宋元學案』中に附入したわけである。全祖望のこのような手法に對しては現在、批判する學者も存在するが、筆者はむしろ、そこに全祖望の苦衷を察すべきであると考える。なぜならば全祖望がこのような手法を通して『明儒學案』の不備を補充したことにより、『宋元學案』と『明儒學案』とを貫通して宋元明三代の儒學の全貌と脈絡とが初めて明らかになることを得たからである。

三　學者の身分・關係の統計と その學術的意味

學者の師承關係は、『宋元學案』全體を貫く一つの特色的な要素でもあり、宋元儒學思想史の道筋を研究する上でも重要な價値を持っていると言える。しかし、これに伴っていろいろな問題も生ずることとなった。二人の學者間に具體的にどのような關係が有ったのかは、實は判斷し難い場合もある。一方で、師承關係は學者の思想形成において重要な役割を果たすとはいえ、學者の自得も往々にして重要である。從って、學者間の師承關係の有無と兩者の思想の異同とは、必ずしも對應しない場合もある。それ故にこの問題を扱うには、思想史發展の脈絡、當時の學術界の狀況、個人の出身・交友、及びその主體的努力等、多くの面に配慮を加えなければならないのである。編纂者は『宋元學案』におけるあらゆる學者の關係・身分を一々明らかにした上で、多重の關係における複數の身分の間に、主要なもの（「主要關係」）と副次的なもの（「副次關係」）とを明確に區別した。そこで次に、多重の關係のうちでどの關係を「主要關係」と見なすか、とい

う問題であるが、「主要關係」選擇の優先順位は、上の「一　學者の師承關係とその學術的意味」で示したように、おおむね關係の人數比率の順位に從っている。卽ち門人―家學―講友―同調―學侶―續傳―私淑という順序である。例えば、ある學者が「門人・家學・講友・同調」など多重の關係を有する場合は、一般的に「門人」をその「主要關係」とし、同樣にある學者が「家學―講友―續傳―私淑」など多重の關係を有する場合、一般的に「家學」をその「主要關係」とし、その他を「副次關係」とする。これによって、『宋元學案』における學者の關係が整然と秩序立って整理されていることがわかる。またこれに基づいて學者の持つ身分を統計することによって、その學者の學術的淵源（先驅と同輩）を考察することができ、さらに「關係」の中に現れた學者數を統計することによって、その學者の學術的影響（同輩と後繼）を考察することができる。

（一）學者の持つ身分と學術的淵源

筆者の統計によると、『宋元學案』中で上述の關係を持つものは凡そ二三六八人であり、彼らの正式名稱は『宋元學案』中、合計三六八九回出現する。その中で出現回數の最も多いのは上述の東萊呂氏一族における著名な學者呂希哲である。彼の正式名稱は『宋元學案』中、全部で十四回出現する。これを圖示すれば附表2の通りである。

その中で卷二十三「滎陽學案」は全祖望が彼のために設けた學案である。そこでは呂希哲は「胡程門人（歐、周再傳）」と表記されており、つまり彼は胡瑗と程頤の門人（歐陽修・周敦頤の再傳）であると考えられている。呂希哲をめぐる多くの關係のうちで、これが編纂者に認定されたその「主要關係」である。卽ち編纂者は、彼の學問の形成において胡瑗と程頤の役割が最も大きいと考えたわけである。この圖表からわかるように、呂希哲は胡瑗・孫復・焦千之・邵雍・程頤・王安石の「門人」、石介・李覯・程顥・張載の「學侶」、呂公著の「家學」、范祖禹の「講友」、歐陽修（焦千之の師）・胡瑗（程頤の師）・周敦頤（程頤の師）の「再傳」である上に、彼もまた「元祐黨人」の一人であってその名が「元祐黨籍」に列せられている。その關係はたいへん複雜であるが、これも呂希哲の「一門を主とせず、一說を私せず[30]（不主一門、不私一說）」という學術的觀點と符合しており、東萊呂氏一族の學問の「博雜」の特色がよく現れている。實際、彼は「宋元學案」中で最も「博雜」な學者であると評し得る、と言っても過言ではないだろう。

次に、『宋元學案』中で出現回數の二番目に多いのは、同じく東萊呂氏一族の著名な學者呂祖謙である。彼の正式名稱は『宋元學案』中、全部で十一回出現する。これを圖示すれば附表3の通りである。

その中で呂祖謙の「東萊學案」では彼を「林汪門人（劉、胡再傳）」と表記する。これがその「主要關係」である。この表からわかるように、呂祖謙は韓元吉・林之奇・劉勉之・芮煜・汪應辰の「門人」、吳松年・朱熹・張栻・陳亮の「講友」、呂大器の「家學」、劉安世・胡安國の「再傳」、司馬光・程頤の「三傳」、胡瑗・程頤の「四傳」である。これは呂祖謙が當時、朱學・陸學・浙學の閒を調停し、これらの學派を合わせて受け入れていた事實と一致している。そのほか、東萊呂氏一族のもう一人の著名な學者である呂本中の正式名稱も九回出現している。呂氏一族はまさに、宋元時代における儒學名門中の筆頭の名に恥じない。

『宋元學案』中における正式名稱の登場回數別に學者名を擧げたも

のが附表4である。附表4を分析してみれば、『宋元學案』における正式名稱の出現回數は、その學者の學術的淵源（師傳・學友など）の複雜さを示す一方で、著名な學者は往々にして複數の師傳を持っていることがよく分かる。これらの關係はもちろん、その學者の思想形成に重大な役割りを果たしたのである。

（二）學者にかかわる關係者と學術的影響

次に觀察の角度をかえて、「關係者」から檢討してみたい。ここでの「關係者」とは、ある關係の中に關わる學者である。例えば、「晦翁講友」「晦翁門人」における「關係者」とは、全て朱熹（號は晦翁）である。それ故、あらゆる關係における「關係者」の出現回數を統計すれば、その學者の學術活動の活發さの程度と影響力とがよくわかるはずである。そこで筆者は、上述のように『宋元學案』に關係を持つ二三六八人（計三六八九回）の「關係者」を類別統計した。「關係者」は全部で七百四十人であり、その中で出現回數が二十八回以上の者は全部で二十四人おり、その構成は附表5の通りである。

例えば朱熹は、「關係者」として關係を持つ二三六八人（計三六八九回）のうち、合計二七四回出現している（二七四回の內譯は附表5を參照）。さらに、前述の「再傳」乃至「八傳」という「間接關係」中にも、朱熹は「關係者」としてしばしば出現している。ここからわかるように、朱熹と關係のある學者の人數は『宋元學案』中で最も多い。特に門人の數は二百二十二人にも達しており、第二位の陸九淵の二倍以上にもなる。この統計は朱熹が宋元二代において最大の影響力のある思想家であったという事實と符合している。朱熹の次に人數が多い陸九淵（心學の創始者）・程頤（「北宋五子」の一人、洛學の完成者）・呂祖謙（「東南三賢」の一人）・張栻（「東南三賢」の一人、湖南學の代表者）・楊簡（陸九淵の有力門人）・胡瑗（宋學の創始者）・楊時（程頤の有力門人、道南學派の創始者）・黃榦（朱熹の有力門人）・許謙（「北山四先生」の一人、金華朱學の代表者）等はみな宋元二代における著名な思想家であり、この統計結果は實に宋元二代の學者間における彼らの影響力の大きさを物語っている。統計の順位はおおむね、當時におけるその學者とその學派の地位や影響力と符合していると言える。概略的に說明すれば、南宋において理學の集大成者朱熹及びその同調者（呂祖謙・張栻）及びその弟子（黃榦ら）は、やはり當時の思想界における最大の影響力を持っており、これに次ぐのが心學の創始者陸九淵とその弟子（楊簡ら）である。つまり朱陸の兩派が最も盛んであったと言える。朱熹の對立者「浙東學派」の葉適・陳亮・陳傅良らも一定の影響力があったが、やはり朱陸兩派には及ばなかった。一方、北宋においては程頤・胡瑗・司馬光・邵雍らが最大の影響力を持っている。特に程頤は「北宋五子」の最後の一人、道學の實質的創始者であって、北宋における影響力がやはり最も大きい。胡瑗は宋學の創始者で、當時最も有名な教育家であり、大きな影響力があった。

おわりに

以上、本稿では、『宋元學案』における學案表と、その正文中に言及された學者間の師承關係とを取り上げ、その內容と學術的意味をめぐって論述した。まとめて言えば、ある學者の同輩にかかわる「關係」は「講友」（目上の學友）・「學侶」（目下の學友）と「同調」（同調者）である。また三（一）「學者の持つ身分と學術的淵源」の節で論じたように、附表2や附表3における「關係」（門人、家學、講友、學侶、再傳、三傳等）に關わる「關係者」は、その學者の思想形成に重

大な役割りを果たした存在（先驅と同輩）である。また三（二）「學者にかかわる關係者と學術的影響」の節で論じたように、附表5の「關係者」との間に種々の關係（講友、學侶、同調、家學、門人、私淑、續傳等）を持つ人物は、その學者（「關係者」）から強い學術的影響を受け、かつその學者の思想傳播に重大な役割りを果たした存在（同輩と後繼）である。このように、『宋元學案』における學者はみな「先驅―同輩―後繼」という關係の序列の中にいる。そこには實に思想史の流れが具現している。從って、學案表と正文における師承關係・人物名稱の表記は、『宋元學案』に登場する厖大な學者相互の多樣多重の關係を示しながら、その全體が分割できない一つの統一體として、複雜で厖大な人脈を形成しているのである。そしてそれは、思想史の脈絡や學者の活動などを研究する上に、極めて有用な素材を我々に提供してくれているのである。

注

（1）本論で引用する底本は、黃宗羲原著、全祖望補修、陳金生、梁運華點校『宋元學案』第一册～第四册（北京中華書局、1986年第1版）である。以下、『宋元學案』からの引用は何册何頁のみを示す。

（2）陳祖武『中國學案史』（東方出版中心、2008年、150～151頁）を參照。

（3）葛昌倫はその修士論文「『宋元學案』成書與編纂研究」第四章「『宋元學案』編纂體例之研究―「黃璋校補謄清本」與王梓材、馮雲濠百卷刊本之比較」第二節「「學案表」的型式」で、異なる版本における學案表の形式の異同を比較しているが、學案表の內容とその學術的意味については觸れていない（臺灣佛光人文社會學院歷史學研究所2004年）。

（4）王梓材「校刊宋元學案條例」「宋元儒異於明儒。明儒諸家、派別尙少。宋、元儒則自安定、泰山諸先生、以及濂、洛、關、閩、相繼而起者、子目不知凡幾。故『明儒學案』可以無表、『宋元學案』不可無表、以揭其流派。」（『宋元學案』第一册、22頁）

（5）王梓材「校刊宋元學案條例」「黎洲、謝山原表僅存數頁、餘竊爲之仿補、以便觀覽。」（『宋元學案』第一册、22頁）

（6）卷60「說齋學案」の、「祖望謹案、乾、淳之際、婺學最盛」以下（『宋元學案』第三册、1954頁）、及び「謝山「唐說齋文鈔序曰」以下（同、1960～1961頁）を參照。

（7）卷90「魯齋學案」、『宋元學案』第四册、2994～2995頁。

（8）陳祖武前揭『中國學案史』（151頁）を參照。

（9）卷34「武夷學案」、『宋元學案』第二册、1200頁。

（10）卷34「武夷學案」、『宋元學案』第二册、1201頁。

（11）卷70「滄洲諸儒學案下」、『宋元學案』第三册、2344頁。

（12）卷72「二江諸儒學案」、『宋元學案』第三册、2411頁。

（13）卷6「士劉諸儒學案」、『宋元學案』第一册、251～252頁。

（14）卷33「王張諸儒學案」、『宋元學案』第二册、1161頁。

（15）卷78「張祝諸儒學案」、『宋元學案』第四册、2622頁。

（16）卷4「廬陵學案」、『宋元學案』第一册、213～214頁。

（17）卷32「周許諸儒學案」、『宋元學案』第二册、1148～1149頁。

（18）卷32「周許諸儒學案」、『宋元學案』第二册、1156～1157頁。

（19）卷65「木鐘學案」、『宋元學案』第三册、2115～2116頁。

（20）卷98「荊公新學略」、『宋元學案』第四册、3261～3266頁。

（21）卷98「荊公新學略」、『宋元學案』第四册、3253～3254頁。

（22）卷98「荊公新學略」、『宋元學案』第四册、3267～3269頁。

（23）卷96「元祐黨案」、『宋元學案』第四册、3165～3189頁。

(24) 卷97「慶元黨案」、『宋元學案』第四册、3212～3229頁。

(25) 卷93「靜明寶峰學案」、「梓材謹案、謝山與鄭南溪論『明儒學案』事目云、「楊文元公之學、明初傳之者尚盛。其在吾鄉、桂文裕公彥良、烏先生春風、向獻縣樸、其著也、是爲慈湖四傳之世嫡、宜補入『遜志學案』之前。」蓋謝山有意修補『明儒』而未暇、每於『宋元儒』之末補而附之。且所謂四傳世嫡、皆在寶峰之門、亦可見寶峰之爲三傳矣。」『宋元學案』第四册、3098頁。

(26) 王宇「方孝孺與黃宗羲對明代理學開端的構建—兼論宋濂不入『明儒學案』」(吳光主編『黃宗羲與明清思想』、上海古籍出版社、2006年、282～283頁)を參照。

(27) 『宋元學案』における宋元思想史の「構築」とその特色(地方色)とについて、小島毅は『中國近世における禮の言說』(東京大學出版會、1996年、181～182頁)において思想史の地域性を强調し、『明儒學案』における思想史の整理は實は「江浙」を中心とするものであると指摘した。この主張に啓發された早坂俊廣は、「關於『宋元學案』的「浙江」概念—作爲話語表象的「永嘉」「金華」和「四明」」(『浙江大學學報』(人文社會科學版)第32卷第1期、2002年1月)において、『宋元學案』も地域性(「浙學」)の傾向を有しており、『宋元學案』は事實を記す書物であるというよりも、むしろ浙東出身の編纂者自身の地域性に根ざした思想史觀を表す學術史である、と指摘している。

(28) 何俊は、『南宋儒學建構』第五章「思想向文化轉型」(上海人民出版社、2004年、297頁)及び「宋元儒學的重建與清初思想史觀—以『宋元學案』全氏補本爲中心的考察」(『中國史研究』2006年第2期)において、『宋元學案』全氏補本を中心として、①「突破道統與歷史還原」②「儒學源流的多元與豐富」③「思想史的視野」の三つの面から全祖望による宋元儒學史の再構築、及びそこに示された思想史觀を考察した。①については、黃宗羲の儒學史觀は前人よりはるかに廣範ではあるものの、なお「濂洛の統をもって諸家を綜會する」という道統論に陷ることを免れていないのに對し、全祖望の補本は黃宗羲の儒學史觀を修正して道統論を突破し、宋元儒學の眞相を復元したとし、その最も顯著な表現が卷98「荊公新學略」、卷99「蘇氏蜀學略」、卷100「屛山鳴道集說略」で、これらは所謂道學に反對する「雜學」と「異學」であったと指摘する。②については、五つの時期に分けて逐一全氏の補充する學案を考察し、それらは多くの思想界の空白を埋めたと指摘する。③については、全氏補本の卷3「高平學案」、卷4「廬陵學案」、卷44「趙張諸儒學案」、卷96「元祐黨案」、卷97「慶元黨案」について論述し、これらは宋代儒學の構築過程において、思想と政治環境などの相互の影響を反映していると指摘した。また夏長朴「『發六百年來儒林所不及知者』—全祖望續補『宋元學案』的學術史意義」(臺灣大學中國文學系『臺大中文學報』第34期、2011年6月、305～348頁)は、全祖望による『宋元學案』の補修について、全氏が朱熹『伊洛淵源錄』の學術史(道學史)の枠組みを突破し、宋代學術の發展の眞相を探り、前代學術史の不足を補ったこと、全氏が門派にとらわれた偏見を破り、事實に基づいて眞實を求めるというその基本信念を貫いたと指摘した。以上、前注所引も含めて先行研究は、『宋元學案』の思想史的價値に注目し、一定の成果を擧げている。ただ『宋元學案』の內容は複雜であり、そこに示された思想史の道筋及び地域性等についてはなお、檢討の必要があると思われる。これらに關する詳しい分析は別稿に讓ることとしたい。

(29) 例えば、卷93「靜明寶峰學案」「蕃遠門人(象山六傳)の危素(1295～1372)、卷82「北山四先生學案」「潛溪門人(朱、劉七傳)」の方孝孺、卷89「介軒學案」「鄭氏門人(晦翁八傳)」の趙謙(既述)等。

(30) 卷23「滎陽學案」、『宋元學案』第二册、908頁。

附表１「『宋元學案』における關係名の統計表」

類別	關係名	回數	人數	人數比率
直接關係	門人	544	2293	65.40%
	家學	293	512	14.60%
	講友	79	219	6.25%
	同調	75	123	3.51%
	續傳	72	113	3.22%
	學侶	61	138	3.94%
	私淑	21	64	1.83%
	之餘	4	11	0.31%
	所傳	7	9	0.26%
	之學	2	8	0.23%
	再傳	3	5	0.14%
	餘派	3	3	0.09%
	之先	2	3	0.09%
	別派	1	2	0.06%
	別傳	2	2	0.06%
	所出	1	1	0.03%
合計		1170	3506	100.00%
間接關係	再傳	113	506	45.71%
	三傳	84	364	32.88%
	四傳	56	120	10.84%
	五傳	31	74	6.68%
	六傳	17	27	2.44%
	七傳	7	13	1.17%
	八傳	3	3	0.27%
合計		311	1107	100.00%

附表２「呂希哲の關係・身分一覧表」

卷次	學案名	關係	關係者	正式名稱
1	安定學案	安定門人	胡瑗	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
2	泰山學案	泰山門人	孫復	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
2	泰山學案	徂徠學侶	石介	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
3	高平學案	盱江學侶	李覯	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
4	廬陵學案	焦氏門人（廬陵再傳）	焦千之	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
10	百源學案下	百源門人	邵雍	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
14	明道學案下	明道學侶	程顥	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
16	伊川學案下	伊川門人（胡、周再傳）	程頤	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
18	横渠學案下	横渠學侶	張載	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
19	范呂諸儒學案	呂氏家學	呂公著	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
21	華陽學案	華陽講友	范祖禹	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）
23	滎陽學案	胡程門人（歐、周再傳）	胡瑗・程頤	侍講呂原明先生希哲
96	元祐黨案	元祐黨籍	元祐黨人	侍講呂滎陽先生希哲（別爲『滎陽學案』）
98	荆公新學略	荆公門人	王安石	侍講呂原明先生希哲（別爲『滎陽學案』）

附表３「呂祖謙の關係・身分一覽表」

卷次	學案名	關係	關係者	正式名稱
27	和靖學案	南澗門人	韓元吉	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）
32	周許諸儒學案	公叔講友	吳松年	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）
36	紫微學案	倉部家學（胡、程四傳）	呂大器	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）
36	紫微學案	林氏門人	林之奇	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）
43	劉胡諸儒學案	白水門人（馬、程三傳）	劉勉之	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）
44	趙張諸儒學案	國器門人	芮煜	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）
46	玉山學案	玉山門人	汪應辰	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）
49	晦翁學案下	晦翁講友	朱熹	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）
50	南軒學案	南軒講友	張栻	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）
51	東萊學案	林汪門人（劉、胡再傳）	林之奇・汪應辰	成公呂東萊先生祖謙
56	龍川學案	龍川講友	陳亮	成公呂東萊先生祖謙（別爲『東萊學案』）

附表４「正式名稱の登場回數別學者名一覽表」

登場回數	學者名	人數	回數合計
14	呂希哲	1	14
11	呂祖謙	1	11
10	陳瓘・舒璘・朱熹	3	30
9	陳傅良・程頤・呂本中	3	27
8	袁燮	1	8
7	晁說之・胡安國・胡大時・張洽・張栻・張載・鄒浩	7	49
6	陳亮・陳沂・程顥・范純仁・樓鑰・陸九淵・饒魯・汪應辰・魏了翁・楊簡・曾幾・張端義・周端朝	13	78
5	車若水・范祖禹・方耒・胡宏・胡一桂・黄庭堅・黄震・李燔・李埴・林光朝・劉清之・呂大忠・呂公著・呂希純・潘畤・彭龜年・沈煥・沈有開・舒衍・宋濂・蘇昞・田述古・王遇・吳澄・徐誼・葉采・葉適・趙汝愚・眞德秀・朱光庭	30	150
4	鮑潁・蔡幼學・曹建・陳剛・陳淵・陳苑・蔡夢程・范仲黼・范子該・方疇・方翥・豐稷・輔廣ら	71	284
3	安劉・李朮魯狲・蔡仍・蔡沈・蔡元定・晁補之・陳淳・陳均・陳孔碩・陳舜兪・陳武・陳埴ら	145	435
2	安燾・包遜・包揚・包約・鮑葆・鮑觀・鮑淮・鮑浚・鮑深・鮑偕・彪虎臣ら	510	1020
1	安實・安熙・安煦・敖繼公・白棟・白炎震・包恢・包希魯・鮑若雨ら	1583	1583
合計		2368	3689

附表５「『宋元學案』における關係者の構成一覧表」

關係者	講友	學侶	同調	家學	門人	私淑	續傳	之餘	再傳	別派	合計
朱熹	10	3	6	4	222	14	12	2	1		274
陸九淵		8	4	1	91	2	7				113
程頤	3	4		2	84	12	5				110
呂祖謙	3	2	5	2	92	1	2				107
張栻	6	4	6	3	69	13	2	1			104
楊簡	7	2		1	59	2	2				73
胡瑗		3	10		48	1	2				64
楊時	6			3	47		1				57
黄榦	13			2	35						50
許謙		2	1	2	41						46
司馬光	6	2	11	5	14	3	3				44
邵雍	2	3		3	21	3	6	2		2	42
葉適		5			36						41
陳亮	3	1	1		34						39
胡安國	7		1	7	22				2		39
吳澄	2		3	1	32						38
趙偕	2	1			33						36
陳傅良		6	3	1	24		1				35
程顥		3	4		24	2	1				34
魏了翁	7	4		2	20						33
尹焞	4				24	1					29
袁燮	5			2	20	2					29
許衡	2		2	2	22						28
眞德秀	4			1	22		1				28